2/24 朝日

黒ずむシャツ ほっとけない

子ども貧困 学校で 2

「背筋伸ばして歩こー」「きょうも優等生でいきましょー」

関西のある公立中学校の女性教諭(55)は毎朝、校門に立ち登校の生徒を迎える。声をかけながら、視線は絶え間なく動く。表情、身なりに変わったことはないか。すれ違う際はにおいを確かめる。

子どもの貧困は見えにくい。しかし五感を研ぎ澄ませばSOSをキャッチできる。この女性教諭の身上だ。全校生徒の半数近くがドリルや給食、修学旅行などの就学援助を受けている。

「風呂壊れてる」

忘れられない生徒がいる。

2013年夏、秋の運動会に向けて校庭で2年生が組み体操を練習中、途中でやめてしまった5人組がいた。

中学時代、教諭チームに支えられた少年。「一緒にいてくれたから、高校に行けた」＝内田光撮影

休み時間、廊下で理由を尋ねた。「あいつと手をつなぐの、嫌や」。言われた少年は髪に脂が浮き、白の体操着は灰にくすんでいた。「お風呂、入れてる?」。少年は視線をそらせた。「風呂、壊れてるし」

少年は中1の時に母親を亡くした。父親と母方の祖母、弟2人、妹との6人暮らし。家計は苦しく、洗濯機も壊れ、制服のシャツはいつも首回りが黒ずんでいた。

根気よく声かけ

「放っておけない」。2年の学年主任を務める女性教諭は職員室に担任、副担任を集め、学校でシャツを洗うことを決めた。放課後に保健室で預かり、体操着で帰宅させる。洗濯機を回し、朝に着替えさせる。そんな日が数カ月続いた。

同僚教諭が少年のケアを役割分担した。同学年の別のクラスを受け持つ30代の男性教諭は友だち役を買って出た。少年は昼休み、いつもひとり自席に座っていた。

「友だちやから。何でも言うて」。最初は「うざい」と返していた少年だが、少しずつ応じるようになった。連日、好きなテレビ番組や音楽について話した。中3の2学期から放課後の教室に残り、つきっきりで苦手の数学を教え、高校に送り出した。

卒業から1年近くたった今年2月、女性教諭は偶然バス停で少年と再会し、数日後に落ち合って近況を聞いた。

「友だちができた」「バドミントン部で楽しくやってる」。ことばを切りながら答える語り口は相変わらずだ。別れ際、「一緒にいてくれて、ありがたかった」と言った。

授業も生活指導も 教員負担

昨年12月の連合総研の調査によると、公立小中学校の教員は1日平均で約12時間在校し、校外の労働時間も1時間超。負担を感じる業務は「保護者・地域からの要望等への対応」「児童・生徒の問題行動への対応」が8割前後を占め、「背景の一つに貧困の問題が潜んでいると推測される」と担当者は言う。

文部科学省は学校を教職員と外部の人材が連携する「子どもの貧困対策のプラットフォーム(拠点)」と位置づけ、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの導入を進めている。大阪府立大の山野則子教授(児童福祉)は「生活指導と授業の両方を完璧にこなせる教員ばかりではない。授業が面白ければ、不登校の生徒も呼び戻せる。生活指導に追われ、授業研究の余力が奪われてはならない」と話す。

進学へ親を説得

中学から高校への橋渡しは、教師の大仕事だ。殊に家庭に問題を抱える生徒に果たす役割は大きい。

東日本の中3の少女(15)はこの冬、高校入試の願書を母親に破られた。娘の進路に関心が薄く、押印などの手続きを嫌った。

進路指導を担う50代の男性教諭は少女の自宅を訪ね母親を説得しようとしたが、顔を見せない。手紙を出し続け、応募締め切り直前に受験の同意を取り付けた。

しかし男性教諭の不安は収まらない。「このままの環境で、彼女は高校に通えるのか」

母子家庭で、母親は職を転々とし、生活は一見して荒れていた。ワンルームの床はごみに覆われ、ライフラインは何度も止められていた。

男性教諭は児童相談所に少女の保護を求めた。しかし児相は少女に命の危険はなく、母子分離には及ばないと判断した。少女ははっきりした意思を示さないが、「あったかいごはんがあるのはいいな」と言う。

卒業を間近に控え、男性教諭はもう一度少女の意思を確認し、児相に保護を働きかけるつもりだ。力になりたい。少女の先生でいられるのは、残りわずかだ。

(長野佑介、後藤泰良)

子どもと貧困について、ご意見をお寄せください。メール(asahi_forum@asahi.com)か、〒104・8011(所在地不要)朝日新聞オピニオン編集部「子どもと貧困」係へ。